



最後のいい時代

山川 稲泉さんは、私の二歳年下でほとんど同年代ですが、二十歳前に自著を出していますよね。どんな経緯で本を書き、ノンフィクションの書き手になったんですか？

稲泉 はじめての本では、高校を中退した経験を書いたんです（僕の高校中退マニユアル）文藝春秋。

ぼくの母親（作家の久田恵氏）もノンフィクションライターだった影響で、いつからか自分が書きたいテーマを掘り下げて、文章として表現していけば、本を出せるんだと自然に思うようになっていました。実際にやってみたら幸運にも本になった。

その後、大検をとって大学に進学し、四年生のころから、マガジンハウスの『ダカーポ』編集部に入入して、雑誌の仕事をもたらうようになったんです。

山川 『ダカーポ』ですか。懐かしいですね。私も読んでいました。

私の場合、仙台の大学を卒業したあとに、都内の大学の夜間部に入り直し、アルバイトのような形で実

話雑誌の記事を書くようになりました。はじめて原稿料をもらってから、今年で二十年になります。

稲泉 ぼくがライターの仕事を始めたのも、ちょうど二十年前ですね。いま思えば、フリーの書き手にとって、最後のいい時代でしたよね。

マガジンハウスには、社員編集者がフリーの若い書き手を意識的に育ててくれるような文化がありました。編集部には何をしてもなく、新聞や本を読んだり、話したりしているフリーライターがたくさんいた。そこで、編集者が「次号でこんな特集を組むんだけど、どうですか」と声をかけてくれるんです。

毎日のように編集部に顔を出していると、なんとなく自分の座る席が決まるし、社食を自由に使えて無料で食事ができました。いまのようにセキュリティがどうこうなんて意識も薄くて、自由な雰囲気だった。それが、伝統的なマガジンハウスのやり方でした。

山川 いまは、どの出版社でもフリーは入り口で受付をさせないと編集部に入れない。しかもコロナ禍で、検温と消毒をする必要がある。隔世の感を覚えます。

稲泉 もうマガジンハウスも勝手に入れませんからね。ぼくが雑誌記事でもっとも自信を持って書けるのは、

二〇〇〇字くらいの原稿であるように思います。それはダカーポ時代の経験のおかげでしょう。

山川 『ダカーポ』編集部が、稲泉さんにとってライターとしての修行の場だったんですね。その意味でいえば、二十代の頃、私は民俗学者の赤坂憲雄先生が主宰していた『東北学』（東北文化研究センター）や『別冊東北学』などの雑誌で、頻繁に仕事をさせてもらいました。

東北各地の祭りや、一次産業、観光資源などについて、毎回八〇〇〇字、原稿用紙二十枚ほどのルポを書くんです。交通費と宿泊費を渡されて、東北各地を一人で旅して、人を探して話を聞き、原稿にまとめる。いま振り返ると、取材も手探り、原稿を何度も直されましたが、あの積み重ねは大きかったです。

稲泉 二十枚のルポを書くには、資料を調べ、現場に行き、人を探し、信頼関係を築いて話を聞く。ノンフィクションを書くために必要な要素がすべて詰まっている。大切な経験だったんでしょうね。

山川 当時、まだ駆け出しですからね。いくら自分がやりたい取材があっても、なかなか一般誌で書かせてもらえなかった。私にとって『東北学』や『別冊東北

やまかわ・とおる●1977年山形県生まれ。著書に『国境を越えたスクラム—ラグビー日本代表になった外国人選手たち』（中央公論新社）、『カルピスをつくった男 三島海雲』（小学館）など。

いないずみ・れん●1979年東京都生まれ。『ぼくもいくさに征くのだけれど—竹内浩三の詩と死』（中公文庫）で第36回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。著書に『アナザー1964 パラリンピック序章』（小学館）など。